

恩膳西遺跡

(第1次・第2次)

遺跡確認とライスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書

980.0
柏木池水溜池

1989.3

長野県原村教育委員会



序

現代の繁栄を誇る文明社会の中で、我々はそれがまるで空気のようにあたりまえのものとして生活しています。

しかし、それはけっして一朝一夕にして出来上がったものではなく、人類史上数百万年の歴史を通じ、日常の体験を学習し、発展させ、記録に残し語り伝えるという作業の繰返しの中で、まるで巨大な積木のように、少しずつ積み重ねられてきたものなのです。そして、その積木の一つ一つが、現在の我々の存在を説明する上で非常に重要なものなのです。

現在、我々が発掘調査によって知ることの出来る古代の遺跡の中にも、私達の先人がその文明の過程において残していった多くの貴重な情報が詰まっています。その情報を記録し後世に残していくことは、これからも歴史を積み重ねていくであろう我々の子孫たちのためにも非常に大切な責務であります。

このたび発掘調査報告書を刊行することになりました「愚厩西遺跡」は、原村農協ライセンスターの建設計画に先立ち、原村教育委員会が範囲確認調査及び緊急発掘調査を行ったものです。当地方においては小規模な遺跡でしたが、いくつかの貴重な資料を得ることが出来ました。

本報告書の発行にあたり、ご多忙のところ終始ご指導、御尽力を頂いた県教育委員会の方々、そして本調査に御理解と御協力を賜った原村農業協同組合に心から感謝とお礼を申し上げます。

平成元年3月

原村教育委員会

教育長 平林 太尾

例 言

1. 本報告は村道改良工事に先立って実施した、長野県諏訪郡原村八ッ手に所在する思臚西遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和62年7月27日から30日（第1次）、昭和62年10月13日から20日（第2次）にかけて実施した。
3. 現場での記録は、平出一治・伊藤 証・平林とし美が行い、土器の拓本・図面の作図とトレースは平林、石器の実測とトレースは鶴田典昭、写真撮影は平出が行なった。執筆は平出・伊藤・平林が話し合いのもとに行った。
4. 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、23の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、長野県教育委員会文化課指導主事太田喜幸・小林秀夫・声部公一、明治大学文学部教授戸沢充則、井戸尻考古館館長武藤雄六、諏訪市史編纂室宮坂光昭の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目 次

序	
例 言	
目 次	
I 発掘調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過	2
III 遺跡の位置と環境	3
IV グリッドの設定と調査方法	5
V 発掘の状況と土層	5
VI 遺 物	7
VII ま と め	9
参 考 文 献	
発掘調査団名簿	

I 調査に至る動機と経過

思膳遺跡にライスセンター建設計画が持ち上がり、その対象地域の詳細分布調査を昭和62年度に国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけて、昭和62年6月に実施した。その成果は、昭和62年6月29日に行なわれた思膳遺跡調査会で検討された。また、同日行われた「ライスセンター建設事業に係る埋蔵文化財保護協議」の席で話し合われた。その結果、極めて重要な遺跡であり、現状のまま保存するのが最も望ましいという意見が強かった。

その後、7月14日に行われた協議で、ライスセンター建設予定地の変更案が提示された。その地域には思膳西遺跡（原村遺跡番号23）が位置している。

本遺跡の発見は古いことではなく、昭和54年度に長野県教育委員会が実施した八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査の折に、縄文土器破片と石鎌を僅かに採集しただけで、その性格および規模などが一切不明であるため、それを明確にすることが急務とされた。しかし、すでに作付けが終わっている時期であり、作付けがされていない僅かな畑地を対象に発掘調査を計画し、昭和62年7月27日から30日に実施した。



第1図 思膳西遺跡遠景（西から）

調査の結果、僅かではあったが縄文時代早期末葉の土器破片を発見したことにより、その性格はあきらかになってきた。しかし、作物の関係で、ライスセンター建設予定地全域を調査できなかったことから、その規模については依然として不明瞭なまま、8月5日に再協議を、9月10日に再々協議を行なった。遺跡の範囲を明確にすることが必要なことになりはなくなり、そこで再調査を計画した。保護協議出席者は、長野県教育委員会文化課・原村農業協同組合・原村役場農林課・原村教育委員会の4者で行った。

その後も、原村農業協同組合と原村教育委員会では協議を進め、遺跡の範囲を明確に、また、性格をより確かなものとするための発掘調査を、作物の取り入れをまち10月13日～20日に実施した。

なお、便宜上7月に実施した調査を第1次、10月の調査を第2次発掘調査と呼ぶことにした。

II 発掘調査の経過

第1次調査

- 昭和62年7月27日 グリッド設定を行い、A地区のグリッド発掘をはじめ。AL-55グリッドで黒曜石、AM-50・AS-41グリッドで土器破片が出土する。その数はあまり多くない。
- 7月28日 A地区のグリッド発掘を行う。AM-50グリッドで黒曜石が出土する。作物の関係でAR-45グリッドの東半分とAQ-45グリッドの西半分の調査を行い、縄文早期土器破片7点を発見する。褐色土の下半分（ソフトローム直上）からの出土であった。
- 7月29日 引き続きA地区のグリッド発掘を行うが、遺物の発見はなかった。グリッドの埋め戻しをはじめ。
- 7月30日 埋め戻しと機材の片付けを行う。

第2次調査

- 10月12日 発掘準備をはじめ。
- 10月13日 グリッド設定をはじめ。
- 10月14日 グリッド設定、A地区とB地区のグリッド発掘を行う。AX-40・BD-60・BI-50グリッドで土器破片、BI-60グリッドで黒曜石が出土するが、その数は少ない。
- 10月15日 小雨がばらつく1日。A地区とB地区のグリッド発掘を行う。AX-60・BY-60グリッドなどから土器破片と黒曜石が出土する。やはりその数は少な

い。

- 10月16日 昨日同様、台風の影響のためか小雨がぱらつく1日。引き続きA地区とB地区のグリッド発掘を行う。AS-60グリッドで土器破片、打製石斧、チャート剥片が、AU-36グリッドなどで土器破片と黒曜石が出土する。午後には、記録の終わったグリッドの埋め戻し作業をはじめる。
- 10月20日 埋め戻しと機材の片付けを行う。

III 遺跡の位置と環境

恩膳西遺跡（原村遺跡番号23）は、長野県諏訪郡原村7025番地付近に位置する。

このあたりは八ヶ岳西麓のはほぼ中央に位置し、裾野の2kmほど上から開析のはじまる前沢川左岸に発達した尾根上に立地している。尾根幅は広い所で100mを計り、一見したところ遺跡の立地条件は隣接する恩膳遺跡同様に恵まれているかのようにみえるが、緩やかに北西に傾斜している事に大きな違いがある。これが本遺跡の性格や規模に多大な影響をあたえたものと思われる。標高は988m前後を計り、地目は普通畑と山林で、遺跡の保存状態は良い。

これにより西は、約3000m先でフォッサマグナの西縁である糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

八ヶ岳西南麓一帯の尾根上には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている。この恩膳西遺跡の周辺にも、第3図および表1に示したように大小様々の遺跡が分布しており、その密度は極めて高い地域である。それらの中で、著名なものをあげると恩膳遺跡、向尾根遺跡、家裏遺跡、前尾根遺跡などがある。

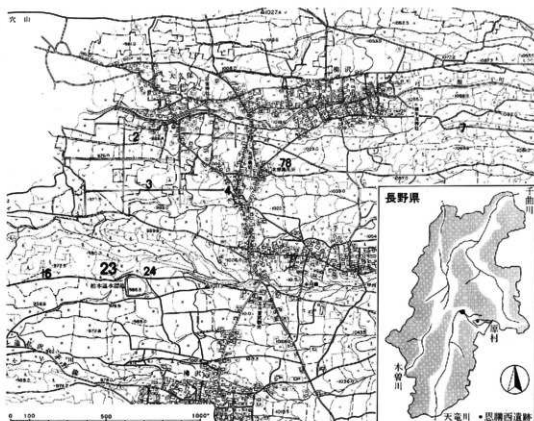
なお、原村における遺跡高度限界は標高1200m前後のラインである。



第2図 原村城の地形断面模式図（赤岳—恩膳西遺跡—宮川ライン）

表1 思膳西遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
1	家裏	○				○					○		昭和59年度発掘調査	
2	大久保前										○		消滅	
3	向尾根	○	○			○							昭和54年度発掘調査	
4	横道下					○					○	○	昭和54年度発掘調査	
5	柳沢					○	○							
6	前尾根						○	○						
7	金芳					○					○		昭和63年度発掘調査	
16	思膳南										○			
23	思膳西		○			○					○		昭和62年度発掘調査	
24	思膳		○			○	○				○		昭和62年度発掘調査	
78	引振日向	○				○	○						昭和60・61年度発掘調査	



第3図 思膳西遺跡の位置と付近の遺跡 (1:20,000)

Ⅳ グリッドの設定と調査方法

発掘に先立ち、第1次発掘では東西南北に軸を合わせた2m四方のグリッドを設定した。第2次調査は、1次調査のグリッド配置と一致するグリッドを設定した。したがって、第1次、2次調査グリッドの軸は一致している。グリッドの呼び方も同様とした。

グリッドは、東西方向には50mの大地区を設け、東からA区・B区・C区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は東からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第5図左上方の2×2mの発掘グリッドでみると、大地区はB区であり、小地区の東西方向はNラインにあたり、南北方向が75ラインで、それは「N-75」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「BN-75」となる。

基本的には、第1次、2次とも層位別にソフトローム層まで調査したが、旧石器時代の遺跡が付近に点在していることを考慮し、第2次調査で、黒曜石の剥片が数点出土したグリッドは、ソフトローム層の調査も行った。しかし、旧石器時代の遺跡存在を確認するまでには至らなかった。

なお、調査グリッドの間隔は、遺物の出土状態および作物の関係で一定していない。

Ⅴ 発掘の状況と土層

第5図のグリッド配置図に示したように、第1次調査で5グリッド20m²、第2次調査では23グリッド92m²。合わせて28グリッド112m²の発掘調査を層位別に実施した。出土遺物は少なく、遺構を検出するまでには至っていない。

ソフトローム層までの深さは、45～55cmとグリッドにより違いがみられた。本遺跡の基本層序は次のとおりである。おおまかな観察結果を記しておくたい。

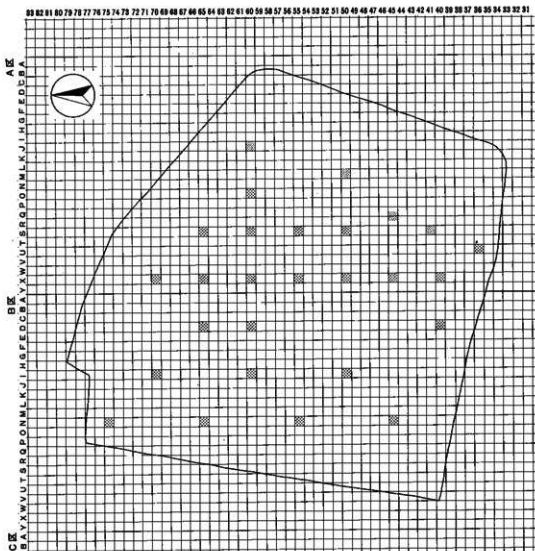
第Ⅰ層 黒褐色土層 畑の耕作土層で20cm前後の厚さである。

第Ⅱ層 褐色土層 第Ⅰ層よりしまっている。25～33cmとその厚さに違いはあるが、大まかにみてB地区の方が褐色土は厚くなるようである。子供の握り拳大から頭大の礫が包含されているグリッドもみられたが、その数は少ない上に人為的とは考えられない状態であった。

遺物は第Ⅰ層と本層からの出土である。



第4图 恩州西道降免掘调查区域图·地形图 (1:2,000)



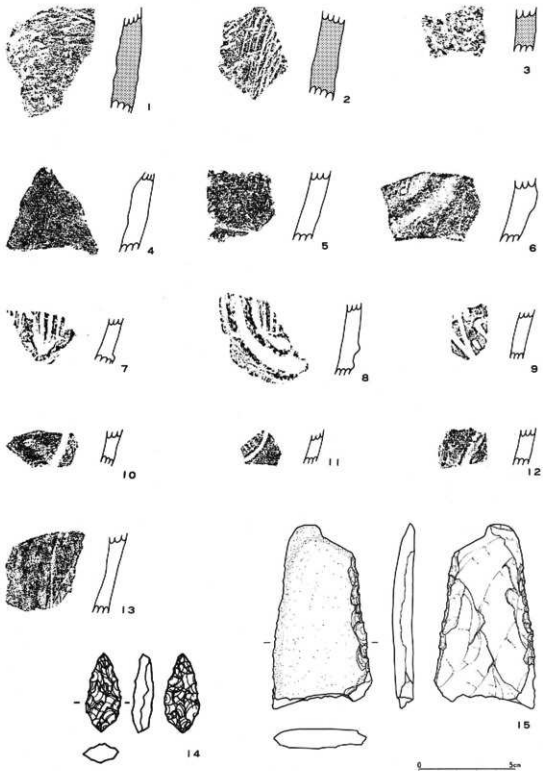
第5図 グリッド配置図 (1:800)

第Ⅲ層 ソフトローム層 10~20cm。

第Ⅳ層 ローム層

VI 遺物

発掘調査の結果、1次調査では3グリッド、2次調査では14グリッドの合わせて17グリッドから土器破片と石器を発見した。しかし、土器は磨滅している。遺物の多かったグリッドでも4点と少なく、縄文時代早期と中期におよんでいるうえに、グリッドは深く遺物はまばらに出土した状



第6図 縄文時代の土器拓影と石器実測図 (1~13・15 1:2, 14 1:1)

態であり、遺物包含層を確認することはできなかった。

それらの資料に若干の説明を加えてみたい。

1 土 器

縄文時代の土器破片34点を発見したが、全て磨滅の著しい小破片ばかりで器形の判別できるものはない。また、素文土器が多く、時期判別できるものは18点と少なかったが、早期の中期に大別できる。

① 早期の土器

小破片ばかり8点あり、焼成は普通で、胎土に多量の繊維を含んでいた痕跡が認められる。末葉の茅山式で、第6図1～3の3点を図示したが、1は条痕、2は沈線が施されている。

② 中期の土器

やはり小破片ばかり10点あるが、第6図4・5は素文土器で、胎土および焼成から中葉の藤内式であろう。図示していないが、やはり藤内式の把手破片1点がある。6は隆帯文と沈線が施された中葉の井戸尻式であろう。胎土・焼成ともあまり良くない。

小破片で明確なことはわからないが、7・8は渦巻状隆帯文の間に懸垂沈線文が施された後葉の曾利Ⅱ式で、胎土・焼成とも普通である。

12は沈線文といわれる「ハ」の字文、13は沈線文で胎土・焼成とも良く堅い。10～12は沈線文と縄文が施されたもので、胎土・焼成ともあまり良くない。末葉の曾利Ⅴ式ないしは井戸尻式である。

これらの土器を時期別にみると、その数は少なくそれぞれの性格を述べることはできない。

2 石 器

発見した石器は少ない。

第6図14は結晶片岩製の打製石斧の破損品で、当地方に一般的にみられるものである。15は黒曜石製の小形尖頭状石器である。図示していないが、黒曜石製のピエス・エスキュー2点と剃片20点、チャートの剃片1点がある。

VII ま と め

調査の結果、立地条件に恵まれているようにみえた遺跡であったが、縄文時代早期と中期の人たちの行動の一端を、辛うじてうかがい知ることができた極めて小規模な遺跡で、当初の予想はくつがえされた。これは、尾根上の平坦部が、緩やかではあるが北西に傾斜していることに大きな要因があるようである。この事実が、付近にみられる大規模遺跡の立地条件と大きく違うところ

ろで、当時の人々が居を構えて生活するには制約が大きすぎたようである。

本遺跡の性格については、発見遺物が少なく多くを語ることはできない。原村誌上巻でも述べたことがあるが、縄文時代中期をみると、集落遺跡と本遺跡のような小規模遺跡が当时无関係であったとは考えにくく、例えば、思贖遺跡で生活していた人たちの生産活動の場であったことが考えられる。しかし、推測の域を出ることができず、今後に残す研究課題であろう。

最後に、関係者各位ならびに発掘調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

参 考 文 献

1980. 03 長野県教育委員会「昭和54年度 八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書」
1985. 07 原村役場「原村誌 上巻」
1987. 08 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報1 思贖西遺跡発掘調査概報」
1987. 10 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財小報3 思贖西遺跡発掘調査概報 第2次発掘調査」
1988. 03 原村教育委員会「原村の埋蔵文化財10 思贖遺跡 昭和62年度詳細分布調査報告書」

発掘調査団名簿

第 1 次 調 査

団 長 平林太尾 (原村教育委員会教育長)
調査担当者 平出一治 (原村教育委員会)
調 査 員 伊藤 証 (原村教育委員会)
調査補助員 平林とし美
調査参加者 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子

第 2 次 調 査

団 長 平林太尾 (原村教育委員会教育長)
調査担当者 平出一治 (原村教育委員会)
調 査 員 伊藤 証 (原村教育委員会)
調査補助員 平林とし美
調査参加者 菊池利光 小林静子 藤原智恵子 宮坂とし子 五味としゑ 真道ふき
中村ふさゑ (順不同)

事 務 局 原村教育委員会事務局——行田竹輝 (教育次長) 武田伊都子 (係長)
大口美代子 (主任) 邊見茂子 佐貫正憲

原村の埋蔵文化財13

思 膳 西 遺 跡 (第1次・第2次)

遺跡確認とライスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書

発行日 平成元年3月10日

発行 原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所 ミウラ企画書籍

